

第5回
明倫短期大学学会
総会・学術大会

プログラム・抄録集

会 期:2006年12月9日(土)
会 場:明 倫 短 期 大 学
大会長:下河辺 宏功(明倫短期大学学長)

第5回明倫短期大学学会 総会・学術大会 日程

【 12月9日(土) 】

1. 総 会 11:30～12:00
明倫短期大学大講堂(5号館)
2. 特別講演 13:00～14:30
明倫短期大学大講堂(5号館)
3. 一般講演 14:40～18:20
明倫短期大学大講堂(5号館)
4. 懇親会 18:30～19:30
国際技術交流会館
1階学生ホール(7号館)

【 タイムテーブル 】

11:00	受付開始
11:30	総 会
12:00	(昼休み)
13:00	特別講演
14:30	(休憩)
14:40	一般講演Ⅰ・Ⅱ
16:00	(休憩)
16:15	一般講演Ⅲ・Ⅳ
17:35	(休憩)
17:50	一般講演Ⅴ
18:20	(移動)
18:30	懇親会
19:30	

— 学術大会プログラム —

● 特別講演 ----- 13:00~14:30

座長 下河辺 宏功（明倫短期大学学長）

『プロフェッショナルを目指して』

講師 熊谷 崇（日吉歯科診療所（山形県酒田市））

● 一般講演 ----- 14:40~18:20

Session I （座長：廣瀬 浩二） ----- [14:40 ~ 15:20]

1. ことばクリニックの挑戦Ⅰ
—2年間の変遷と新たな複数の言語聴覚士による取り組み—
○青木さつき¹⁾，大平芳則²⁾，入山満恵子²⁾，栗崎由貴子²⁾
(¹⁾ 附属歯科診療所ことばクリニック，²⁾ 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻)
2. ことばクリニックの挑戦Ⅱ —新潟市教育委員会との協力体制—
○入山満恵子¹⁾，大平芳則¹⁾，栗崎由貴子¹⁾，青木さつき²⁾
(¹⁾ 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻 ²⁾ 附属歯科診療所ことばクリニック)
3. ことばクリニックの挑戦Ⅲ —新たな患者層への支援—
○栗崎由貴子¹⁾，入山満恵子¹⁾，大平芳則¹⁾，青木さつき²⁾
(¹⁾ 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻，²⁾ 附属歯科診療所ことばクリニック)
4. ことばクリニックの挑戦Ⅳ —運営改善への提言—
○大平芳則¹⁾，青木さつき²⁾，入山満恵子¹⁾，栗崎由貴子¹⁾
(¹⁾ 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻，²⁾ 附属歯科診療所ことばクリニック)

Session II (座長: 佐野 裕子) [15:20 ~ 16:00]

5. 口腔周囲の不随意運動と咬合高径の低下に対して治療用義歯を適用した1症例
○松本崇臣¹⁾, 野村章子²⁾, 伊藤圭一²⁾, 丸山 満²⁾
(¹⁾歯科技工士学科研究生, ²⁾歯科技工士学科)
6. 少数歯残存症例に応用した Silicone-Model-System
○伊藤圭一¹⁾, 野村章子¹⁾, 松本崇臣²⁾, 丸山 満¹⁾
(¹⁾歯科技工士学科, ²⁾歯科技工士学科研究生)
7. 実験的に付与したリングライズド・オクルージョンの食物動態評価
○丸山 満¹⁾, 河野正司²⁾, 澤田宏二³⁾, 本間 濟⁴⁾, 根岸政明⁵⁾
(¹⁾歯科技工士学科, ²⁾新潟大学, ³⁾新潟大学大学院医歯学総合研究科
摂食機能再建学分野, ⁴⁾会津中央病院口腔外科, ⁵⁾(株)東伸洋行)
8. 各種過酸化尿素濃度によるホームホワイトニングの臨床成績
○野崎怜美¹⁾, 笠原由紀¹⁾, 金子 潤²⁾
(¹⁾附属歯科診療所, ²⁾歯科衛生士学科)

Session III (座長: 山田 隆文) [16:15 ~ 16:55]

9. 糖質のう蝕病原性とステファン曲線の再考察
○小黒 章 (歯科衛生士学科)
10. 小学生の歯肉炎・歯石沈着状況と刷掃習慣の関連
○本間和代, 木暮ミカ¹⁾, 幸田奈美, 和田麻衣子, 木戸真紗美,
平澤明美, 渡邊美幸, 江川広子, 小黒 章
(¹⁾歯科衛生士学科, ¹⁾歯科技工士学科)
11. 小学校におけるプリシード・パートから抽出された強化因子に基づく
歯科保健指導の効果
○幸田奈美, 本間和代, 木暮ミカ¹⁾, 和田麻衣子, 佐藤裕子
(歯科衛生士学科, ¹⁾歯科技工士学科)
12. スケーリング実習における学生の自己評価と指導上の課題
○和田麻衣子, 本間和代, 幸田奈美 (歯科衛生士学科)

Session IV (座長 : 藤口 武) _____ [16:55 ~ 17:35]

- 1 3. 彫刻用ワックスの色と眼精疲労の関係について
○木暮ミカ (歯科技工士学科)

- 1 4. 気流検査と学生アンケートによる実習環境の粉塵問題の検討
○五十嵐雅子 植木一範 (歯科技工士学科)

- 1 5. KJ 法による歯科技工士教育の問題抽出
○植木一範 五十嵐雅子 中澤孝敏 佐々木聡 (歯科技工士学科)

- 1 6. 歯科衛生士学科 2 年の歯科技工室・ことばクリニック見学実習の効果と課題
－明倫短期大学附属歯科診療所における取り組み－
○木戸真紗美, 本間和代, 渡辺美幸, 幸田奈美 (歯科衛生士学科)

Session V (座長 : 野村 章子) _____ [17:50 ~ 18:20]

- 1 7. 本学歯科技工士学科における学生の異動実態
－休・退学および留年の実態と今後の課題について－
○相馬泰栄, 中澤孝敏, 植木一範 (歯科技工士学科)

- 1 8. 本学歯科衛生士学科における入学時・在学中・卒業時の成績推移
－入学時基礎学力調査との関連－
○平澤明美, 渡辺美幸, 佐藤裕子, 小黒章, 福島祥紘 (歯科衛生士学科)

- 1 9. 新卒歯科衛生士の就業状況の実態および意識調査
○渡辺美幸, 平澤明美, 本間和代, 江川広子 (歯科衛生士学科)

「プロフェッショナルを目指して」

熊谷 崇
日吉歯科診療所

診療所で働く歯科衛生士は常にプロフェッショナルでなくてはなりません。プロフェッショナルな歯科衛生士とは、きちんとした知識や技術を習得した上で、自分で考え行動する歯科衛生士と言って良いでしょう。当然、院長に言われて仕方なく取り組んでいると言うような状態ではプロフェッショナルとは言えません。常に患者さんの健康を守り育てるという目標のために、与えられた条件のなかで何ができるのかを自分の頭で考えて実行できる歯科衛生士を目指して下さい。

確かに現在の制度においては、歯科衛生士が歯科医師の監督のないところでその業務を行うことはできませんが、臨床の場においては、歯科医師以上に患者さんと親身に接する機会も多く、歯科衛生士の方が患者さんに頼りにされることも多いものです。自分の口腔内の健康を託して、信頼してついてきてくれる担当患者さんを多く持つ歯科衛生士は幸せです。その様な患者さんをたくさんもてるような技量と人間性のある歯科衛生士になって下さい。

次に、プロフェッショナルな歯科衛生士としては、診療所が何かをしてくれるのを待つのではなく、自分が歯科衛生士として診療所に何を貢献できるかを常に考える歯科衛生士であってほしいと思います。環境がそろってないからとできない理由を挙げるのではなく、できることは何かあるかと考えることからスタートして下さい。それぞれの診療所の環境や経営的な問題はさまざまですから、すぐに歯科衛生士の理想的な環境にならないこともあります。院長とよく相談し、目標を定め、歯科衛生士の立場からもコスト意識を持って毎日の臨床に取り組んでみて下さい。そうする

ことによって、自ずから環境は整ってくるはずと信じます。

最後に、患者さんから院長からも信頼される歯科衛生士となるためには、自分自身にきちんと投資をして下さい。これまで多くの歯科衛生士を見てきましたが、実力があると自他とも認める歯科衛生士は、ただ院長に与えられた課題をこなすだけではなく、自分自身をより成長させる目的を持って自ら講演会に出かけたり、必要な器具器材を吟味したりと、自分自身に磨きをかける努力を怠っていません。歯科衛生士として知識や技術を身につけるために、自らすすんで自分に投資をする心がけも大切です。その結果は結局自分の仕事に全てかえてきます。そして、そうすることによって初めて、欧米の歯科衛生士のように自分の実力を認めてもらうことでよい仕事の間を確保したり、生活もエンジョイできるような環境を得ることができるのです。一人でも多くのプロフェッショナルな歯科衛生士の出現を期待したいと思います。歯科衛生士ひとりひとりが、がそうした高い理想を持ち、自ら成長しようとする歯科衛生士を目指して下さい。自分の仕事の結果について、胸を張って報告できるような臨床を目指して頑張ってください。

1 ことばクリニックの挑戦 I

—2年間の変遷と新たな複数の言語聴覚士による取り組み—

○青木さつき¹⁾, 大平芳則²⁾, 入山満恵子²⁾, 栗崎由貴子²⁾

(¹⁾ 附属歯科診療所ことばクリニック, (²⁾ 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻)

【はじめに】10月にことばクリニックは開室2周年を迎えた。2年間を振り返るとともに、教員が診療に加わることで新たに可能になった、4人の言語聴覚士(以下 ST)の専門分野を生かした診療体制の利点と、今後の課題について報告する。

【対象と方法】1. 平成16年10月の開室から18年9月までの2年間に来室した351名について、2年間を4期に分け、延べ患者数と紹介元の推移を調査した。2. ひとりの患者に複数のSTが関わった事例を通し、各STの専門分野をどのように診療に生かすことができるか検討した。

【結果と考察】1. 延べ患者総数はI期から順に、591名、726名、786名、966名と順調に伸び、中でもIV期の伸びが著しかった。専任ST1名では対応しきれず頭打ちとなっていたところへ、III期の終わりから教員STが診療に加わったことが大

きい。紹介元では、I期は演者の前任地からの継続と紹介患者が大半を占めていたが、IV期には他の医療機関と教育機関(学校、幼稚園、保育園)からの紹介が倍増した。これはことばクリニックの知名度や信頼度が上がってきたためと考えられた。2. 3通りの協力体制が可能であった。A. 患者が症状を併発している場合に2名のSTが並行して担当する。B. 1名のSTが担当していた患者を、別の専門分野の知識をもったSTが担当する時間を設け、診療内容の幅を広げる。C. 複数のSTで担当する時間を設け、意見を交換する。これによって、患者へのサービス、STのレベルがともに上がったことは言うまでもない。

【今後の課題】患者は増え続けており、教員STの協力があっても対応しきれない状況が生じている。さらなる発展へ向けての取り組みが望まれる。

2 ことばクリニックの挑戦 II

—新潟市教育委員会との協力体制—

○入山満恵子¹⁾, 大平芳則¹⁾, 栗崎由貴子¹⁾, 青木さつき²⁾

(¹⁾ 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻 (²⁾ 附属歯科診療所 ことばクリニック)

【はじめに】今秋開室から2年を迎えたことばクリニックの来室者数は11月初旬時点で360名を越え、また新患者数は伸び続けている。その大半が発達途中の子どもであり、生活の拠点である家庭、そして学校などの教育機関との連携は、支援を継続する上で欠かせない。そこで、クリニックから積極的に新潟市教育委員会に働きかけ、外部機関との協力体制の構築を目指した今年度の活動の様子について報告する。

【連携の目的】1) 来室した多くの子どもにとって、生活の中心となる学校等での支援は不可欠であり、そのためにはクリニックでの評価・指導内容について家庭および教育機関と共通理解を持たなければ支援の意味がないため。2) ことばクリニックは一民間機関なので、ただ受身の運営では成り立たず、その機能と役割、そして専門性を理解しても

らうためには自ら積極的に外部に働きかけていく必要があるため。

【活動の様子】1) 今年度始めに室長含む2名で新潟市教育委員会を訪問、ことばクリニックの存在と現状について報告した。2) 11月には教育委員会職員がクリニックを訪問、来室者の中で19年度春に就学を迎える子どもたちについて保護者の許可の下、知能等の評価結果と言語聴覚士の視点から予測される今後の問題などについて報告し、学級種別についても協議した。特に就学については発達に遅れを持つ子どもたちの保護者の不安は強く、その思いを代弁する場ともなった。

【今後】就学以外の問題についても情報を共有し、支援の方向性を探ること、また言語聴覚士という職種の専門性を活かすスーパーバイズ的な役割を果たせるようになることが今後の目標である。

3 ことばクリニックの挑戦 III —新たな患者層への支援—

○栗崎由貴子¹⁾, 入山満恵子¹⁾, 大平芳則¹⁾, 青木さつき²⁾

(¹⁾ 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻, ²⁾ 附属歯科診療所ことばクリニック)

【はじめに】ことばクリニックは、本年度から新たな取り組みとして脳血管障害等後遺症患者への臨床を開始した。そこで今回はこの約半年間を振り返り、受診した患者層を調査したので報告する。

【対象】平成18年2月から11月までの期間に本クリニックに来室し、言語聴覚療法を受けた後天性障害患者6名(男性5名, 女性1名)。

【方法】言語聴覚療法記録をもとに、1. 原因疾患, 障害名, 本施設初診時年齢, 2. 他の診療機関での言語聴覚療法経験の有無, 3. 本施設受診に至った経緯と理由について後方視的に調査した。

【結果】1) 原因疾患は脳出血2名, 脳挫傷4名。脳挫傷は全例交通外傷であった。障害は失語症3名, 高次脳機能障害2名, 高次脳機能障害と運動障害性構音障害の合併1例であった。本施設受診時の年齢は13歳~60歳までで, 平均年齢は33歳であった。2) 6例中5例で他機関にて言語聴覚療法の経験があった。3) 紹介元は新潟県リハ

ビリテーションセンター2名, 脳外傷友の会2名, 福祉事務所1名, 介護支援専門員1名であり, 開始当初想定された「高齢者」「嚥下障害」「在宅支援」等のニーズはなかった。受診者は, 他機関において「言語聴覚士不在」, 「リハビリの対象年齢外」, 「多忙を理由に継続してくれない」などの経験から, 本施設へは「病院に比べて融通がきく」「専門的サポートが受けられる」「福祉・教育・就労機関と連携が密である」を理由に長期的な支援を希望して受診していた。

【考察】医療制度におけるリハビリテーションは年々短期化する傾向にあるが, 本クリニック受診の後天性障害者は若年が多いので, 機能訓練のみならず社会参加に向けた長期的な支援を提供していく必要がある。教育機関附属施設という恵まれた環境を長所として, 他医療機関では不十分となりがちな福祉・就労までをサポートする施設として地域に貢献していくことが大切であると考え

4 ことばクリニックの挑戦IV —運営改善への提言—

○大平芳則¹⁾, 青木さつき²⁾, 入山満恵子¹⁾, 栗崎由貴子¹⁾

(¹⁾ 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻, ²⁾ 附属歯科診療所ことばクリニック)

【はじめに】本クリニックが現在抱えている問題に言及し, それに対する改善策について提言する。

【問題】新潟市およびその周辺において, 小児の言語障害について助言・訓練を実施している施設が少ないため, 増え続ける患者および保護者のもとより, 教育委員会からも本クリニックの活動は期待されている。しかし, 人員上の制限からそれに十分応えることができないのが現状である。本年4月より教員の体制が変わったことにより, 教員も臨床活動を本格的に行なえるようになり多少改善されたが, まだ十分とはいえない。言語聴覚士(以下ST)の業務は飽和状態にあり, 患者の要望に応えるべく訓練予約ができない状況である。また, 4月より, 発症から180日を超えると原則的にリハビリテーション(以下リハ)は中止となり, さらに改善の見込みがある, と医師が診断した場合にリハを継続できることとなった。そのため, 発症から180日以上経過した, 後天性障害を持つ

患者の受け入れが, スムーズにできなくなった。

【方策】本クリニックに寄せられる期待に十分応えるには, STを増員することが必用であると考ええる。また, 発症より180日を超えた患者のリハに対する要望は強く, 必用な場合には医師の診断によりリハを継続できる可能性がある。本診療所に医師が勤務することができれば, より幅広い患者を受け入れることが可能となる。

【課題と今後】STの増員と医師が勤務することにより, 様々な問題も生ずる。人員をどう確保するか, ということから始まり, 訓練室やコスト等の問題が解決されない限り, 実現は困難である。しかし, これらの問題の解決策を模索し実現することは, さらに質の高い医療サービスを社会に提供できるということを意味する。また, 専任STを3人確保できれば, リハの診療報酬は単価で現在の2.5倍となる。以上のことは, 本クリニックのさらなる発展と社会貢献につながるであろう。

5 口腔周囲の不随意運動と咬合高径の低下に対して 治療用義歯を適用した1症例

○松本崇臣¹⁾, 野村章子^{2),3)}, 丸山 満²⁾, 伊藤圭一²⁾
(¹⁾ 歯科技工士学科研究生, ²⁾ 歯科技工士学科, ³⁾ 附属歯科診療所)

【症例の概要】

患者は50歳代の女性で, 下顎義歯の不適合と粘膜の疼痛のため来院した。

脳性麻痺による口腔周囲の不随意運動と下顎位の不安定さ, 咬合高径の低下によるオーバークロージャーの所見が認められた。歯牙の欠損部位は $\overline{6+37}$, $\overline{7+24-7}$ であり, 残存歯 $\overline{7|456}$ は全部鑄造冠が装着され, $\overline{3}$ は残根状態であった。

【治療内容と経過】

下顎義歯の製作に際して, 不随意運動に由来する義歯の浮き上がりに対応するため, 磁性アタッチメントを $\overline{3}$ の義歯床内へ取り付けた。また顎位の不安定さと, オーバークロージャーを改善するため, 咬合挙上すると共に臼歯部をスプリント様のフラットテーブルに形成した。

治療後11週目で, これらの問題に改善傾向が

認められたので, 臼歯部に有咬頭歯を排列して, 明確な咬合位が得られるかを観察した。

次に, 上顎義歯の新製に伴い, 咬合平面の修正が必要となったため, 咬合調整に工夫を行いつつ24週目には不随意運動に配慮した無咬頭歯を再排列し下顎義歯を完成した。

【まとめ】

歯科技工士がチェアサイドで診療内容を把握し, 歯科医師と密に連携しながら, 治療用義歯を用いて段階的に治療を進めた結果, 義歯の不適合と粘膜の疼痛を改善できた。さらに顎位の安定化と顔貌の回復, 咬合平面の改善を図ることが可能であった。

【文献】

- 1) 本田岳史ほか. 診断用義歯を適用した咬合位不安定症例について. 明倫歯誌 8(1):94,2005.

6 少数歯残存症例に応用した Silicone-Model-System

○伊藤圭一¹⁾, 野村章子¹⁾, 松本崇臣²⁾, 丸山 満¹⁾
(¹⁾歯科技工士学科, ²⁾歯科技工士学科研究生)

【はじめに】

近年演者らは, 総義歯治療における患者の負担軽減と治療手順の簡略化を目的とし, 概形印象を行わずに使用義歯の複印象から研究用模型と個人トレーを製作する方法(Silicone-Model-System)を歯科訪問診療を含めた臨床に導入し, 良好な結果を得ている。今回は, 無歯顎症例に限らず, 少数歯残存症例にも本法を応用したので技工手順を中心に報告する。

【方法】

1. 使用材料

模型材は, 技工用重縮合型シリコーン印象材タイタニウム(セルマック社)を使用した。

2. シリコーンを用いた研究用模型の製作

1) 残存歯部を模型上に再現するため, 局部用の既製トレーとアルジネート印象材で, 残存歯部および義歯の取り込み印象を行った。2) この印象内面にシリコーンを圧接し, 残存歯部と使用義歯粘膜面部の複印象を行った。3) 義歯の研磨面と人工歯部の形態はシ

リコーンコアを採得して記録した。

3. 個人トレーの製作

1) 残存歯部にパラフィンワックスでスペーサーを付与した。2) 通常の粉液比よりも液量を約20%増量し, 柔らかい状態に調節した常温重合レジン(オストロンII, ジーシー)をコアの人工歯部に慎重に圧接した。3) 模型本体をコアに押しつけ, レジンの圧接操作を繰り返して行った。その際に, 模型本体にコアが適切な位置に収まるまで, バリとなった余剰レジンを取り除いた。4) 辺縁部や粘膜面部の微調整を行い, 必要に応じてハンドルを取り付け完成した。

【まとめ】

- 1) 無歯顎症例に限らず少数歯残存症例においても, 使用義歯の外形を概ね再現した個人トレーを用いることにより, 確実な印象採得が可能であった。
- 2) 特別な器具, 装置が不要なため, チェアサイドや訪問診療先でも, 30分以内で作業が完了した。

7 実験的に付与したリングライズド・オクルージョンの食物動態評価

○ 丸山 満¹⁾, 河野正司²⁾, 澤田宏二³⁾, 本間 済⁴⁾, 根岸政明⁵⁾

(¹⁾ 歯科技工士学科, (²⁾ 新潟大学, (³⁾ 新潟大学大学院医歯学総合研究科 摂食機能再建学分野,

(⁴⁾ 会津中央病院 口腔外科, (⁵⁾ (株) 東伸洋行)

【目的】義歯の安定と咀嚼機能の回復という2つの要件を満たすことを意図して咬合圧を舌側化し、床の安定を図ることができる咬合様式として考案されたリングライズド・オクルージョンの咀嚼機能は、*in vitro* の実験による食品破砕能力については、ある程度の知識が得られている。

本研究では *in vivo* で、可撤性橋義歯の咬合面形態を変化させて、粉砕粒子の口腔内移送能力と粉砕能力を測定することで、実験的にリングライズド・オクルージョンの食物動態を評価した。

【方法】被験者は顎口腔系に異常を認めない29歳の健常な男性で、右側上顎第一大臼歯部の欠損部にコーヌス・テレスコープクラウンを支台装置とした可撤性橋義歯を補綴した。橋義歯の頬側咬頭内斜面に咬合接触がある間隙量0mmを基準に、下顎頬側咬頭との間隙量を0.5, 1.0, 1.5mmとした咬合面形態を設定した。咀嚼能力の評価方法には、3gのピーナッツを、5, 10, 20回と一定回数

咀嚼させた。口腔内移送能力の指標とした貯留率は、総回収重量に対する各側の回収重量の比率を求めた。粉砕能力の指標とした粉砕度は各側の回収重量に対する10 mesh 篩を通過した粒子重量の比率とした。

【結果と考察】上顎臼歯の頬側咬頭内斜面を削除して、下顎頬側咬頭との間隙量を増加させると、粉砕された食物の頬側口腔前庭への貯留率は有意に増加し、一方、舌側への貯留率は減少した。粉砕度は、間隙量0.5, 1.0mmでは有意差がなく、間隙量1.5mmでは有意に低下した。上下顎臼歯頬側咬頭間の間隙量を増していくと、粉砕食物の舌側貯留量が低下し、頬側口腔前庭へ粉砕度の高い粒子の貯留量が増加する様相が観察された。

床の安定性を考慮にいれてリングライズド・オクルージョンを付与する場合、その頬側咬頭間の間隙量は食物動態の点から0.5mm削除量の咬合面が望ましいと云える。

8 各種過酸化尿素濃度によるホームホワイトニングの臨床成績

○ 野崎怜美¹⁾, 笠原由紀¹⁾, 金子 潤²⁾

(¹⁾ 附属歯科診療所, (²⁾ 歯科衛生士学科)

【緒言】当初のホームホワイトニング剤は10%過酸化尿素製剤が中心であったが、最近ではより高濃度の製品も発売されている。本研究では、各種過酸化尿素 (CP) 濃度によるホームホワイトニングの臨床成績を比較検討した。

【研究方法】2003年1月から2006年9月までに附属歯科診療所に歯のホワイトニングを希望して来院した患者のうち、Nite White™ EXCEL 3またはNite White™ ACP (いずれも Discus Dental) によるホームホワイトニングを行なった113名 (平均年齢21.5才) を調査対象とした。CP濃度10%, 16%, 22%のうちいずれかを選択してホワイトニングを行ない、患者の満足が得られた時点で処置を終了した。漂白効果の評価は、明度順に配列したシェードガイドにて記録を行い、漂白前後の明度上昇ステップ数 (ΔSgu) をカウントした。漂白処置にともなう副作用については、自発痛、冷水・温熱痛、歯肉疼痛の有無と程度に

ついて患者への問診により調査した。

【結果および考察】 ΔSgu の平均値は10%CP (52名) が 7.4 ± 2.5 , 16%CP (49名) が 6.7 ± 2.6 , 22%CP (12名) が 6.3 ± 2.6 であり、濃度による漂白効果の有意差は認められなかった。自発痛出現状況は10%CPで23.1%, 16%CPで49.0%, 22%CPで41.7%であり、10%CPが16%CPに比べて有意に低い結果となった。冷水・温熱痛出現状況は10%CPで50.0%, 16%CPで49.0%, 22%CPで41.7%であり、濃度による有意差は認められなかった。歯肉疼痛の出現状況は10%CPで7.7%, 16%CPで14.3%, 22%CPで33.3%であり、10%CPが22%CPに比べて有意に低い結果となった。以上の結果から、冷水・温熱痛はいずれの濃度でも4~5割程度発生するものの、10%CPを用いた場合に他の副作用が比較的少なかった。それ以上の濃度の漂白剤による処置を行なう場合は、経過を注意深く観察する必要がある。

9 糖質のう蝕病原性とステファン曲線の再考察

○小黒 章 (歯科衛生士学科)

【はじめに】

ステファン曲線を支配する主要因子は実験的条件下では歯垢の aging, 唾液流量, 唾液酸緩衝能とされるが, 日常生活における歯表面の pH 変化とう蝕活動性ないしう蝕経験の関わりには不明部分が多い。

【方法】

19-20 歳女子 20 名を被験者として 10%糖質水溶液 (蔗糖, ぶどう糖, 麦芽糖, キシリトール, ソルビトール) による 25ml, 10 秒間洗口の後, 特定の歯面 6 箇所 (1|1 (唇側), 1|1 (舌側) 歯間隣接面, 56, 56 頬側歯間隣接面, 6, 6 咬合面中心窩) の経時的 pH 変化を左右を区別せず修復箇所を避け, 微小接触型 pH 電極 Beetrode と比較電極 DRIREF-2 を用い, Orion290A イオンメーターで測定した。

【結果と考察】

1) 歯表面の pH がどの部位で低下するのは予測

できない. 2) 10%蔗糖による歯表面の pH 変動は, しばしば臨界 pH を越え多様で遷延性のステファン曲線を示し, pH5.7 より下降した個所は 42/91, 0.4615 であった. 3) 同じく, 10%ぶどう糖では 28/91, 0.3077 であった. 4) 10%麦芽糖により歯表面 pH が 5.7 を越えたのは 14/91, 0.1538 であった. 5) この pH 降下に速効 (5 分) 型と遅延 (10 分) 型の 2 型がある. 6) 蔗糖ではさらに遷延型があり, pH 降下の多くは pH 降下・時間 (分) 積で言えば極く僅かである. 7) 口腔内のどこでも, 10%キシリトール, ソルビトール水溶液洗口による歯表面の pH 変動は認められない。

10 小学生の歯肉炎・歯石沈着状況と刷掃習慣の関連

○本間和代, 木暮ミカ¹⁾, 幸田奈美, 和田麻衣子, 木戸真紗美,
平澤明美, 渡邊美幸, 江川広子, 小黒 章
(歯科衛生士学科, ¹⁾ 歯科技工士学科)

【目的】

国民の歯科保健に対する意識の向上は, 2 大歯科疾患の一つである齲蝕の予防に大きな効果を上げてきている. しかし, 歯石沈着や歯肉炎を有する児童の数は減少していない. この現状から, 中学生や高校生の年代において歯周病に移行することが懸念され, 健康日本 21 の「歯の健康」や 8020 運動の目標達成に逆行することになる. そこで我々は, 児童の口腔清掃状態が向上しているにも関わらず, なぜ, 歯石沈着や歯肉炎が減少しないのか, その原因追究に先駆け, 口腔内の実態を把握するため, 診査および調査を行った。

【方法】

調査は, 新潟市立真砂小学校全校児童, 計 464 名 (男子 274 名, 女子 190 名) を対象に, 平成 18 年 10 月 24 日~11 月 16 日の 6 日間行った. 診査は, 歯科用簡易チェアに児童を腰掛けさせ,

ペンライトとミラーを用いて, 歯垢・歯石の沈着および歯肉炎の有無について一人の歯科医師が, 新潟市学校保健診査基準に準じて行った. さらに歯科衛生士が歯みがき状態について個々に聞き取り調査を行った。

【結果と考察】

1 日の歯みがき回数は 2 回の 74.1%, 磨く時期は朝食後の 82.5%が最多でかなり良好と言える. また, 歯垢付着者は 5 年生が 33.3%, 歯石沈着者は 4 年生が 20%, 歯肉炎有所見者は 5 年生が 44.4%と各々最も高かった. これは, 混合歯列期のための叢生により, 歯面清掃が不十分になっていることが考えられる. 全校の平均値を新潟市と比較すると, 歯垢が 1.3%, 歯肉炎が 9.1%高かったが, いずれも軽度の者が多く, 歯科衛生士による個々の状況に応じた歯口清掃指導で十分改善が見込まれると考えられる。

11 小学校におけるプリシード・パートから抽出された強化因子に基づく歯科保健指導の効果

○幸田奈美, 本間和代, 木暮ミカ¹⁾, 和田麻衣子, 佐藤裕子
(歯科衛生士学科, ¹⁾ 歯科技工士学科)

【はじめに】従来の小学校における歯科保健指導は、児童に対し一方的に知識、技術を与える方法が主流であった。今回、真砂小学校における歯科保健指導を実施するにあたり、プリシード・パートから強化因子を抽出し、それに基づいて適切と思われる講話、実習を取り入れた。その効果を知るため、実習前・後にアンケートを行い、児童の歯の大切さおよびう蝕に対する意識・理解の変化について調べた。

【方法】①対象：新潟市立真砂小学校2・4・5年生の計219名 ②時期：平成17年11月30日 ③講話内容：2年生「6歳臼歯の大切さ」、4年生「虫歯とおやつ」、5年生「虫歯と歯並び」 ④方法：実習前アンケート→講話→歯の汚れの染め出し→自己歯みがき→磨き残しチェック→個別指導→実習後アンケートの順で行った。

【結果】2年生実習前の「6歳臼歯の大切さ」の理解度は、30.9%と低かったが実習後は、98.6%まで向上した。4年生の「虫歯とおやつ」では

70.6%から93.4%、「5年生の虫歯と歯並び」では42.5%から85.0%の児童が理解したと回答した。しかし、高学年になるほど理解度は低下傾向を示した。また、朝晩の歯みがきを実施している児童は、2年生が38.1%、4年生が64.1%、5年生が48.0%であったが、実習後は各学年において90%以上が「これからはがんばって歯を磨こうと思う」と回答した。

【考察】歯科保健指導の方法や内容については、事前に保護者を対象としたアンケートを実施し、その自由記述による質的データをKJ法により分析した結果を参考にした。4・5年生の理解度が2年生に比べて低かったのは、内容がやや難しくなったためと思われる。全体的に児童の口腔内に対する意識が向上したのは、単に磨き方だけの指導に止まらず、講話により歯みがきの必要性を考える機会を与えたことが有効であったと思われる。

12 スケーリング実習における学生の自己評価と指導上の課題

○和田麻衣子, 本間和代, 幸田奈美 (歯科衛生士学科)

【目的】実習終了後に学生が自己評価を行うことは、学生自身が到達度を把握するうえで、また指導者が学生の理解度や個人差を知るうえで有効であると考えられる。そこで、スケーリング実習終了後に行った自己評価を分析し、検討した。

【対象および方法】①対象：歯科衛生士学科平成17年度生122名 ②方法：スケーリングのマネキン実習後、14項目の到達目標に対して4段階自己評価を行い、(A：自分でできた B：少しの指導を受けた C：常に指導を受けた D：指導を受けてもできない)項目ごとに各段階の比率を求めた。さらに、122名中、臨床実習においても自己評価を行うことができた23名について、マネキン実習と臨床実習の比較を行った。

【結果および考察】対象者122名のマネキン実習後の自己評価では上顎前歯唇側で63.1%、下顎前歯唇側で46.7%、下顎左側臼歯部舌側で43.4%と、直視しやすい部位においてA：自分でできた(以下、A)と答えた者が多かった。また、臨床実習と

の対比ができた23名においては、マネキン実習では、上顎前歯唇側で60.9%、下顎前歯唇側で34.8%、下顎左側臼歯部舌側で43.5%と、直視しやすい部位においてAと答えた者が多かったが、臨床実習ではAと答えた者は前歯部においては変わらず高い値を示したものの、下顎左側臼歯部舌側では8.7%、その他直視可能部位においても10%前後とマネキン実習に比べ低い値を示した。その要因として、マネキン実習では体験できなかった口唇や舌の力が大きく関与していると考えられる。患者さんの口腔内でスケーリングを行うことで口唇・舌の排除をしながらのスケーリングの困難さや、直視したくてもできない術者の位置があることがわかったためと思われる。今後のマネキン実習において、口唇・舌の力を体得させる工夫や適切な術者の位置確保の指導を行う必要がある。今後も学生の自己評価をもとに指導のポイントを明確にした効率的・効果的実習を進めていくことが重要であると思われる。

13 彫刻用ワックスの色と眼精疲労の関係について

○木暮ミカ (歯科技工士学科)

【目的】

歯科技工で用いられている歯科用ワックスは、その用途や気候、好みによって様々な硬さ、色調の中から最適なものを選択して使用されているが、眼精疲労の軽減についての他覚的な検査所見は得られていない。そこで調節微動解析装置を用いて、調節微動の高周波成分出現頻度の変化を記録し、調節疲労によって生じた機能変化に色調による差があるのかを調査し、歯科用ワックスの色調の違いによって眼調節機能の変化に差があるのか、また、得られたデータと被験者の使用感・嗜好色との相関について調査した。

【方法】

調節微動解析装置 (NIDEK 社製 AA-1) を用いて、調節負荷+0.5~-3.0D で記録した時の最低屈折値と最高屈折値との差 (以下調節反応量) と、屈折値が最低屈折値と 0.0~-0.75D 差の範囲にある時の調節微動の高周波成分出現頻度の平均値 (以下 HFC 値) の 2 項目とした。また実験後に

「作業のしやすさ」、「疲労度」、「嗜好色」について 5 段階評価のアンケートを実施し、回答結果を因子分析した。

【結果と考察】

調節反応量、HFC 値ともに navy, canary yellow が著しい増加を認めた。またアンケート結果を因子分析した結果、嗜好色とした色を対象としたワックス作業後の値は低下を示す傾向がみられた。

歯科技工で用いられている歯科用ワックスはその用途や気候、好みによって様々な硬さ、色調の中から最適なものを選択して使用されているが、今回の調査結果より、歯科用ワックスの色調には中~高明度で低彩度のワックスが望ましく、眼精疲労は作業当事者の嗜好にある程度依存するということが示唆された。

14 気流検査と学生アンケートによる実習環境の粉塵問題の検討

○五十嵐雅子 植木一範 (歯科技工士学科)

【はじめに】

大学が全入時代を迎える現在、歯科技工士養成所においても入学生の獲得に困難を窮めている。大学の設備は、学生の入学を決定づける重要な項目のひとつである。本学歯科技工士学科は、実習作業環境に対して学生からの不満は多く、健康も配慮した教育方針を示す設備投資は重要と考える。そこで、実習室の歯科技工作業環境を学生の観点に着目し、防塵対策と設備について検討する。

【対象および方法】

歯科技工士学科 2 年生 54 名を対象とした。歯科技工士学科 1 階実習室の集塵機の吸引力についてアンケートと気流検査による実態調査を行った。アンケートでは、集塵機の吸引力は歯科技工作業の種類別、材料の種類別、粉塵の飛散状況で評価した。くわえて、気流検査器 (ドレーゲル (株) 製フローチェック) を用いて、集塵機の使用条件 (吸引口の開放数) における粉塵の空気中への飛散状況のシミュレーションを行い、比較検討した。

【結果および考察】

アンケート結果では、54 名中 53 名の学生は実習室の集塵機の吸引力に対して不満を感じていた。不満を感じる歯科技工作業を材料の種類別で見ると第 1 位がレジン、次いで石膏、金属であった。また、気流検査の結果、吸引口の開放数が少なく吸引力が良好な場合でも、吸引口から 6 cm 以上では微細な粉塵が空気中に停滞した。実習は通常、工程が同時進行するため、吸引口の同時使用により吸引力は極端に低下する。その場合、ほとんどの微細な粉塵が吸引されずに空気中に飛散し、学生が吸気する可能性が高いと考えられる。この解決には、集塵機の増設、集塵機付き歯科技工機の導入、空気清浄機の導入等が必要である。また、高機能フィルターマスクや研磨ボックスなどの使用も応急処置として考えられる。

【まとめ】

学生が健康かつ快適に学業に取り組める環境を提供できるように粉塵問題の検討が急務である。

15 KJ法による歯科技工士教育の問題抽出

○植木一範 五十嵐雅子 中澤孝敏 佐々木聡 (歯科技工士学科)

【はじめに】

本学における歯科技工実習は、教員一人あたりの学生数が多いという特性上、さらなるインストラクションの効率化と質の維持向上が求められている。そこで、本学科では学生対象の研修会を開催し、技能を上げるために今の歯科技工実習には何が足りないのか、それはどうしたら解決するのか等を考えて自己開発することを目的として、KJ法を用いたグループ学習を行っている。今回、2年分のデータが得られ、歯科技工実習における問題を抽出し、分析したので報告する。

【対象および方法】

対象学生は、平成17、18年度歯科技工士学科1年次学生とした。実施時期は、両年度、実習に慣れてきた7月中旬とした。KJ法の実施は、1グループ7～10名とし、教員をグループに1名ずつ配置して行った。歯科技工実習における指導や環境の問題点を抽出し、その原因を考慮して分類した。さらに2次元展開法を用い、横軸を重要度、

縦軸を緊急度とする2次元平面を作り、問題の優先度を探った。後日、さらに具体的な問題解決策を各自立案し、内容をレポートにて提出させた。

【結果および考察】

KJ法による意見抽出の結果、「デモが分かりづらい」「見づらい」「専門用語がわからない」「指導が分かりづらい」などの意見が多く抽出された。

「指導法」のカテゴリは、二次元配置を行った結果、実習の出来に直接大きく影響があるとされたため、重要度、緊急度ともに高く位置づけられた。

「指導の統一」というカテゴリは、重要度は高いが、解決には時間がかかるという結果であった。

「作業環境問題」に関するカテゴリについては、緊急性が高く位置づけられた。「学生内問題」は、重要度、緊急度共に低い位置にあるが、対策は行い易いという意見であった。その他、教員の絶対数が足りない、実習時間が足りない、材料が足りない、人間関係問題などのカテゴリが抽出され、それぞれ優先度が分析された。

16 歯科衛生士学科2年の歯科技工室・ことばクリニック見学実習の効果と課題 ー明倫短期大学付属歯科診療所における取り組みー

○木戸真紗美、本間和代、渡辺美幸、幸田奈美 (歯科衛生士学科)

【はじめに】

歯科衛生士が業務を行ううえで、チーム医療・他職種業務の理解を深めることは必要かつ重要であると考えられる。そこで、歯科技工士および言語聴覚士の業務を理解することを目的に、本学歯科衛生士学科2年の臨床実習において、本学附属歯科診療所に併設されている歯科技工室、ことばクリニックの見学実習を取り入れ、その効果と課題を検討した。

【対象および方法】

対象は、平成18年5月～11月までの期間、附属歯科診療所で実習を行った歯科衛生士学科2年生87名とした。実習前に、見学希望の有無、見学したい内容、歯科技工士、言語聴覚士の職業に対する理解度等を、実習後に、実際の見学内容、勉強になったこと、実習に関する要望等についてアンケートを実施し、その結果を分析した。

【結果および考察】

歯科技工士、言語聴覚士業務の認知度は、見学前はほとんど知らなかった者が各々36%、33%であったが、見学後は13%、3%に減少した。歯科技工室見学において、学生が希望した補綴物作製過程を見学できたことは、その後の診療補助実習時の理解に繋がったと思われる。ことばクリニックの実習は、来院患者と接するトレーニング参加型が多かったことから、小児の対応について理解できたと思われる。本実習は、歯科技工士、言語聴覚士の業務と歯科衛生士に必要な知識や患者対応について理解を深めるのに多いに役立ったことが伺える。また、実習時間に関する学生の要望が多かったことから、今後、本実習を充実させ短期間で効果をあげるために、事前・事後学習や実習方法の検討が必要であると思われる。

17 本学歯科技工士学科における学生の異動実態 — 休・退学および留年の実態と今後の課題について —

○相馬泰栄, 中澤孝敏, 植木一範 (歯科技工士学科)

【はじめに】 本年は明倫短期大学歯科技工士学科が1997年に開設されて10年目にあたる。この間、学生個々の異動状況は学科会議で報告されてきたが、異動実態は統計的に検討されていない。10周年を機に、これまでの学生指導を振り返り、今後の指導のあり方を探るため、学生の異動実態(休学者・退学者・留年者)について検討した。

【対象および方法】 1997年度から2004年度までに本学科に入学した458名を対象に2006年3月までに異動のあった休学者・退学者・留年者の動向を学年別, 男女別, 通学形態別, 入試形態別に実態を調査し, 比較検討した。ただし, 2005年度・2006年度入学生については現在, 本学科に在籍中のため, 検討資料の都合上除いた。

【結果および考察】 本学科における休学率は3.1%, 退学率は9.6%, 留年率は2.4%であった。休学の主な理由は進路選択の不適切, 退学の主な理由は進路選択の不適切と学業不振, 留年の主な理由は

出席日数不足と学業不振であった。

- 1) 学年別の休学者, 退学者, 留年者とも1年次に集中した。
- 2) 男女別の退学率・留年率は男子が女子より高く, 休学率では男女別の差異はなかった。
- 3) 通学形態別の退学率は自宅通学生が退学者全体の68.2%と高い値を示した。
- 4) 入試選抜別の退学率は公募推薦入試者が他の入試選抜者より高い値を示した。

以上の結果から, 休・退学者の多くは受験の段階で歯科技工の本質の理解が不十分のまま受験, 入学したことが一因であることがわかった。さらに, 学生の学力, 適正などの問題もあげられるが, これらの問題は多因子により構成されており, 今後さらに調査を継続し, 要因を明確にして解決しなければならない。入学前にオープンキャンパスなどで歯科技工の職業を深く理解させるとともに夢を持たせる努力も必要であると考ええる。

18 本学歯科衛生士学科における入学時・在学中・卒業時の成績推移 — 入学時基礎学力調査との関連 —

○平澤明美, 渡辺美幸, 佐藤裕子, 小黒章, 福島祥紘 (歯科衛生士学科)

【はじめに】

歯科衛生士教育は, 知識と技術の両面からの教育であるが, 近年入学後, 学力不足や学習意欲の減退により, 退学や歯科衛生士試験不合格の結果となる者が増えてきた。そこで, 本学科学生の10年間の成績から, 入学時, 在学中と卒業時の成績の関連を明らかにし, 今後の学生指導にどのように活用すべきかを検討した。

【対象および方法】

平成9年度から16年度に入学した学生を対象に, 在学中の成績は1学年総合, 2学年総合, 卒業試験, 模擬試験の成績とし, 卒業時の成績は歯科衛生士試験(国家試験)自己採点の結果とした。また, 入学時成績は平成16~18年度入学生を対象に実施した, 入学時基礎学力調査の結果とし, 各項目を調査比較した。

【結果および考察】

(1) 卒業時すなわち国家試験自己採点結果は

徐々に下降傾向を示し, 平成9年度入学生と平成15・16年度入学生の間には明らかな差が認められた。

(2) 国家試験自己採点結果と前述の在学中の成績の間には, 高い相関が認められた。

(3) 平成16年度生の入学時基礎学力調査結果と国家試験自己採点結果の間には, 比較的高い相関($r=0.5342$)が認められ, 平成16年度生からの3年間の入学時基礎学力調査結果は, 年度毎に低下傾向を示した。

以上の結果から, 本学科学生は卒業に近づくに従い学力の向上が認められるが, 平成16年度入学生までの過去8年間の学力(国家試験自己採点結果)は下降傾向にあり, 在学中の学生も入学時基礎学力調査結果から, この傾向は継続していると推察された。今後は, 入学時基礎学力調査の結果を学力向上に活用できるよう検討を重ねたい。

19 新卒歯科衛生士の就業状況の実態および意識調査

○ 渡辺美幸, 平澤明美, 本間和代, 江川広子 (歯科衛生士学科)

【はじめに】

わが国では平成18年9月の完全失業率が4.2%, 24歳以下に至っては8.5%にも上るといわれている。それに対し, 平成18年3月の本学新卒歯科衛生士の求人倍率は3.4倍であり, 学生が就職先を選択できる状況にあった。それにも関わらず, 卒業後すぐに職場を変わる歯科衛生士が増えている。昨今, 学生の気質や技能レベルが変化し, 職場でのトラブルも多様化していることから, 新卒歯科衛生士の就業状況と意識の実態を把握するため, 就職先との懇談会ならびに新卒歯科衛生士を対象にアンケートを実施した。それより明らかとなった問題点を踏まえ, 歯科衛生士教育のあり方を検討し, 就職指導に役立てることを目的とした。

【対象および方法】

歯科衛生士学科第8回生(平成18年3月卒業)102名を対象に就業状況等(10項目)について平成18年6月郵送法によりアンケートを実施した。回収率は76.5%(78名)であった。

【結果および考察】

現在の就職先に対する満足度は, 満足しているが41%, どちらともいえないが42%, 満足していないが17%であった。雇用条件よりもスタッフとの人間関係が満足度に大きく影響していることがわかり, コミュニケーション能力を向上させることが必要と考えられる。また, 主な業務内容は, 歯科診療補助が96%, 次に歯科保健指導が84%, 歯周病予防処置が79%, う蝕予防処置が64%とあまり片寄りがないことがわかった。学生時代の教育への要望は, 暫間被覆冠作成や印象採得, SRP, 保険請求などがあげられ, 反復練習の必要性が伺え, 3年制教育において充実させる必要があると思われる。今後の勤務の意思は, 68%の者が継続すると回答したが, 12%の者は退職を考え, 悩んでいることから, 自らの問題解決能力を養う必要があり, 今後は社会性や豊かな人間性をもち, 即戦力となる歯科衛生士を育てることが重要であると考えられる。

～ ご 案 内 ～

I. 参加者の方へ

1. 受付 : 11時より明倫短期大学5号館大講堂前にて受付致します。
2. 当日参加費 : 会員・学生 : 無 料
3. 年会費 : ￥3,000 (未納会員は当日受付にてお支払い下さい。)
4. 懇親会費 : ￥2,000 (受付にて参加される旨お知らせ下さい。)
5. 入会 : 当日, 新入会を受付致します。

II. 演者の方へ

- ・ 次演者の方は講演10分前までに「次演者席」に着席下さい。
- ・ 一般講演時間は8分以内, 質疑応答は2分です。
時間厳守および座長の指示に従い円滑にわかりやすく発表を行って下さい。
- ・ パソコン用液晶プロジェクターは一台です。

III. 座長の先生方へ

- ・ 次座長席に, 担当セッション開始10分前までに着席下さい。
- ・ スケジュールが切迫しておりますので, 円滑な進行をお願い致します。

明倫短期大学学会 事務局 連絡先

〒950-2086 新潟市真砂3-16-10 明倫短期大学内

TEL: 025-232-6351 FAX: 025-232-6335

E-mail: gakkai@meirin-c.ac.jp

URL: <http://www.meirin-c.ac.jp/~gakkai/>